

# みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 2 NO2

昭和50年10月10日 発行  
編集・発行人 松戸 節三

〒280

千葉市中央港1丁目10番1号  
☎0472-42-8311(代表)



津田信夫「鳳翔董炉」1937

# 教育棟に思う

館長 松戸 節三

## ユニークな鼎型美術館

いま、日本全国に二百館に及ぶ公私立美術館が建設されているが、すべての美術館が管理部門、展示部門、教育普及部門を一棟内にまとめているようである。

ところが、わが千葉県立美術館は、管理棟、展示棟、教育棟の三ブロックを鼎型に建設し、この三棟を総合的、有機的に機能させようとするユニークな美術館である。

## 工事の遅延

本来、この美術館は、その基本設計の段階で、予算約十億円を計上し、管理、展示、教育の三棟を全一期で着工完成させる計画であったが、時あたかも、昭和四十八年秋開催の若潮国体芸術展示会場に充てるべく、取り敢えず展示棟の建設予算が県議会で可決された。

引き続き着工する筈の管理

棟、教育棟は、その工事費を予算に計上する段階で、所謂石油ショックにあい、管理棟だけが、昭和五十年当初着工となった。

最後に残った教育棟は、第三期工事となり予算計上が懸案となっている。

## この美術館の目玉は教育棟

展示棟が完成し、管理棟の完成が間近いこの美術館に、教育棟が完成しない限り千葉県立美術館は目玉を失うことになる。

美術館活動の中で、展示活動が主軸をなすことは論を俟たないが、地方美術館が、郷土の教育文化活動の中心的役割を果すためには、不得定多数の県民が、自ら進んで美術活動に親しむ場がなければならぬ。

美術資料室、図書室、視聴覚室、アトリエ、談話室、講堂等県民に公開される施設設備を抱含するのが教育棟であ

## 教育棟という名称

教育棟という名称は、ややもすると、学校教育の延長ないし補完を連想させ易いが、美術館は、博物館法にいう社会教育の場であって、学校教育の補完施設ではない筈である。

学生・生徒・児童を含めて不得定多数の県民が利用し学習する場である。

美術に関して、「みる」「かたる」「つくる」ことのできる施設が教育棟である。

ここに来る人々が、過去の美術を知り、現在を語り、そして自ら明日への糧を美に求めることができることを期待しているのである。

教育棟はむしろ、研修棟とか学習棟と称すべきかも知れない。

## 教育棟はせいたくな施設ではない

この美術館は、展示棟と管理棟だけでは未完成であり鼎がその一本の足を欠くようなものである。

ホテルのフロントやロビー、学校の視聴覚室や図書室がせ

いたくな附属施設ではないように、この美術館にとって教育棟は無くしてはならない建物である。

## 美術講座の開設も

この教育棟では、講演会や講習会の開催も可能であり、アトリエや実習室を利用して、絵画、彫刻、工芸、書道等の入門講座を開設して、美術を愛好する県民へのサーヴィスに努めようとしている。

美術館友の会にとつては、恰好な施設であり、進んでその利用に供したい。

友の会をはじめ他の美術団体のために事務室も用意する計画がある。

## しばらくの辛抱か

昭和四十四年十二月に発足した県立美術館建設懇談会、四十五年十一月に第一回の会議を開いた美術館設置準備専門委員会が、数次の会議討論を重ね、練りに練った素晴らしい基本構想が、その実を結ぶのもそんなに遠い将来ではない。懇談会並びに委員会の委員各位に対し美術館職員一同心からの謝意と敬意を表わし、教育棟の完成に努力したい。

## 日誌抄

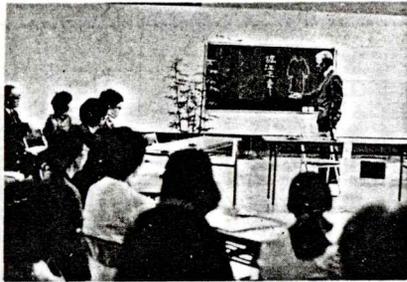
昭和50年5月～8月

5月	29日	評価委員会議開く
6月	8日	原勝郎展終る
6月	15日	入館者一四一九五名
7月	28日	近代フランス名作版画展始まる。一一八点
7月	5日	講演会「近代美術と千葉」遠藤健郎氏
7月	14日	第一回友の会の集い
7月	15日	近代フランス名作版画展終る。二八〇七名
8月	2日	学芸員実習生三名、二週間の実習に入る。
8月	8日	収蔵作品七人展、日本の子どもの絵始まる。
8月	11日	六一点、三〇〇点
8月	12日	友の会役員会開く。
8月	20日	協議会議開かれる。
8月	31日	CTC県政トピックスに放映のため、収蔵作品七人展、日本の子どもの絵を撮影。
		家庭の日ポスター展始まる。九四六名
		収蔵作品七人展、日本の子どもの絵終る。
		一二、五二六名

# 晩年の弟子

堀江正章先生と私

遠藤健郎



講演会風景

なにしろ非常な老令で、私達は先生の授業を、遊び時間と心得ていた。

私達の腕白ぶりを前にしては、叱りつける元気もなかったであろう。ふざける、けんかする、暴れる、しまいは大勢で歌をうたって大騒ぎする。先生は達筆なお家流で「静粛」と黒板に書くと、黙然として、教卓の前に坐って居られた。

新入学の最初の図画の時間だった。私達新入生はまだ様子がわからなかったため、静かに、先生の言うまに、自分の掌の写生を神妙にやっていた。先生は羽織袴で机の列の間を静かに歩いて見ておられたが、私の横に来ると、立ちどまり、私の作品を見て、「君はよろしい」と唯一一言小さな声で言われた。

私は唯一度の、私にだけ聞えたこの言葉のために、その後の先生の様子がわかってくるにつれて始まったロウゼキや大騒ぎに、なにかしら、申し訳けないと言う心のやましさをもち続けていた。

今日になって考えると実際に先生に対して申し訳けない気持になる。まさにあれは悲劇だった。さけることの出来ない悲劇だった。

私達は、先生を「ぐずさん」と呼んでいた。この「ぐずさん」の御出勤姿は、私達少

年には、一種の名状しがたい異様なコッケイなものに思われた。私達の中学校は百メートル程の急な坂の上にあつて、私達は毎朝始業の鐘の音に聞きながら、カバンをこわきにかかえ込んで一気に駆け上つた。「ぐずさん」はこの坂を静かに一歩／＼ジグザグに上つて行くのだった。そして途中で立ち止って息を入れ、松の木の間から東京湾をとおして、富士山の眺められる処では、長い間杖によりかかっていた放しように立ち止つていた。私達少年の若い生命力が、そのうしろ姿を笑殺したのである。

こうして、毎年／＼幾百の少年が、その黒い足の裏を見せて巣立つて行ったが、とうとう先生は、私の在学中に、まさに朽木の倒れるように亡くなられた。その時、私は最高学年の生徒を代表して、先生のお葬式に参列することになった。小さな座敷の中のお棺の上の位牌のうしろの、先生の写真の横に、古めかしい額に入れた先生の油絵が飾られていた。そのときはじめて先生の絵を拝見したが、モチーフは忘れてしまった。何か明るい絵であつたように記憶

している。そして、幾百人の少年の長年の無礼の代表者のような気持で肅然として頭をたれたことをおぼえている。

中学校を出ると、熱に浮かされたような青春の時代がやつて来た。美術学校を卒業した。そして、新しい絵や流派の中を無我夢中で放浪したすえに、私もいつか、一人の画家の画業を、彼の生きた時代と、その人の生活と共に見るような年頃になった。そして年も三十才も過ぎると、華かな名声や傑作のかたわらで、名もなく朽ち果てた多くの画家達にも心を引かれて、多くの先輩達の生きざまを求めて、明治の洋画史の柔譜を探ぐるうちに、私は再び堀江正章と言う名前にめぐりあふことになった。あの「ぐずさん」が亡くなられてからすでに二十年の歳月が流れ去っていた。その人が、明治洋画史の最初の柔譜の中に居り、サン・ジョアンニに師事して、後の明治、大正の画壇の幾人かの大家を指導し、その後は全く人々から忘れられて、一田舎中学の教師として陋屋に死んだと言ふ事実が私の胸に深くつきささるのだった。

私の卒業した中学校は、古

い秀才主義の学校で、私には、そこでは、軍人と役人と医者以外には人間ではないと言ふ教育が行なわれていたように思われるのであるが、「ぐずさん」には、そうした学校の若者達には用がなかったに違いない。お互に縁なき衆生として別れさつたのだ。彼等は、ただ騒々しく暴れさわぎ、その黒い足の裏を見せて駆け去つていったのだ。

先生は、明治の人らしく、細心で謙讓で、心から先進の欧州の絵画に敬服し、また広く美または文化と言ふものに對して、非常な気迫と、純粹な私たちの信仰を持って、おられたに違いない。そして、洋画の術を持って一生の仕事とした明治前期の洋画史に屈する最後の人だったに違いない。先生は、あえていえば、黒田清輝の如き法律家くずれの、新しがり屋ではなかつたのだ。その黒田イズムによつて画壇から遠ざかり、世間から忘れられて、田舎中学の一教師として死んだ。そして、この黒田イズムは、今日から見れば、決して日本の絵画によい結果をもたらしたとは言えないかもしれない。

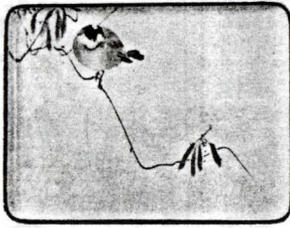
それにしても、その時代の

# 近代日本工芸の巨匠展

10・4・10・14 無料

国公立美術館の所蔵作品を中心に、近代日本の代表的工芸作家87人の作品87点を陶芸、漆工、金工、染色、ガラス、七宝、木工、竹工、人形の各部門別に展示し、日本における近代工芸作品を広く紹介するものです。

これらの中で、千葉県に關係のある作家及び作品をみますと、無線七宝に成功し、帝室技芸員の瀧川惣助（弘化4年〜明治43年）の「小禽図盆」



瀧川惣助「小禽図盆」



香取秀真「八稜鏡瑞鳥文喰籠」



津田信夫「雄雉圖」

日本芸術院会員、文化勲章受章の香取秀真（明治7年〜昭和29年）の「八稜鏡鳥文喰籠」（昭和12年三聖代展出品）、日本芸術院会員の津田信夫（明治8年〜昭和21年）の「雄雉圖」（昭和9年）、日本芸術院賞受賞、千葉県文化功労者の宮之原謙（明治31年）の「花

瓶空」（昭和31年第12回目展出品）日本芸術院賞受賞、秀真の令息香取正彦（明治32年）の「鑄銅潤和盤」（昭和29年第10回日展）、秀真の弟子長野瑛志（明治33年）の「はじきはだ田口釜」（昭和37年）、日本芸術院恩賜賞受賞、前期千葉県美術会に参加した河村靖山（明治23年〜昭和42年）の「瑠璃磁群図花瓶」（昭和8年第14回帝展）などがあげられます。

## 元禄風俗画展

特別公開  
仮名手本忠臣蔵絵巻

好評で終る！

この展覧会は、本年一月内で発見された「仮名手本忠臣蔵絵巻」二巻の特別公開である。この絵巻は、幅二十七センチ、上巻が二十二メートル、下巻二十メートルに、竹田出雲らの作として浄瑠璃、歌舞伎で有名な「仮名手本忠臣蔵」を画題として、軽快な筆運びと淡い彩色とで描かれている。奥書に「文権九丙戌初夏踏齋北馬」と記されているところから、一八二六年に北馬の牛によることが判明する。作者の北馬は、富獄百景等で

名高い葛飾北斎の最古参の弟子で、踏齋、駿々齋、駿々亭と号した。江戸に生れ、当時流行した馬琴、蘭山などの読本の挿絵、狂歌措物などを多く製作し、肉筆の遺作も多い。晩年剃髪して弘化元年（一八四四年）八月に七十四歳で死去している。この絵巻は、文政九年の作であるので、北馬五十六歳の作品ということになる。彼の師北斎は、当時の浮世絵師が好んで描いた義士物を描かなかつたと言われている。

しかし、義士物を描かなかつたというのは誤りで、数枚の義士物を遺しているし、特に享保期に描いた物は、西洋透視法を試みた作品として注目される。

今回出品された絵巻は、師北斎が寛政年間に描いた「辻君図」に見られる淡彩の技法や、「北斎漫画」の軽快な筆運びを北馬が受け継いでいたことを知り得るであろう。しかも、描かれている風俗は、歌舞伎等の舞台衣粧ではなく、当時の生活様子を再現している点からも注目すべき作品と評価された。

無 9・6・9・28 料

思想は、それを宿した人間が死ぬまでは、少なくとも生きつづけてもらいたい。その時代の美は、少なくとも、それを美と感ずる人々が死にたえるまでは、美しくあらねばならぬ。人の命の尺度にあわぬ文化の移り変りなど言うものはほしくない。

「ぐずさん」の晩年の弟子である私も、いつか世間の片隅みにおしやられてこんなことを考えるようになった。先生が東京の画壇から田舎の中学にこられた事情は、何の変哲もない、明治、大正、昭和の急激な歴史の流れに過ぎないと言ふこともできよう。しかし、私は、老先生が、古い城跡の中学の急な坂道を、老軀をひきさげて、静かに登って行かれ、多くの若者達に追いつかれながら、途中の松の根方で息を入れて、朝の清冽な空気のなかで、一望に眺められる内湾の彼方の、白雪の富士山を見つめておられた、その姿から、世の有様に対するはげしい怒りと、絵の悲しみを学ぶのである。

六月二十八日の

講演会抄録

(画家)

(三頁より)

本館の所蔵図書について

印旛郡印西町出身の文化勲章受章鑄金家で、古代金工の研究者としても名高い香取秀真の著書を二・三紹介する。

**日本鑄工史稿** 江戸の鑄物師名譜で鎌倉時代から江戸時代末までの鑄物屋の系図を調査し江戸の鑄物師を中心にまとめたもの。鑄工名譜、鑄工年表等資料も正確で便利。この分野では前人未踏の貴重な仕事である。大正三年八月刊  
**金鼓と鱈口** 金鼓と鱈口の考証論文と、鱈口の銘文集

め、論説したもの。総表紙の小型豪華本で三百部限定版。

跋文には「生れて十日を経たる是等四人を置きて再び妻を失う」とある。夫人の百ヶ日に香奠返しの意味で出版されたもの。大正十三年三月刊。  
**日本金工史** 東洋芸術史講座の一篇として出版。第一編序説は金工の各名称、種類、技法、材料について詳説。第二編時代は、金石併用時代より平安時代までの通史で、引用文献等相当蒐集されたことが判る。統編の鎌倉以後の著述がなされず終ったことが惜まれている。昭和七年十月刊。

古美術及び文学鑑賞の旅

友の会会員の方々の最も関心のある行事の一つに「見学鑑賞旅行」があります。その第一回として次の通り秋の東金、成東方面に古美術と房総にゆかりのある文学のあとを探ねます。

期 日 10月12日(日)  
 見学場所 本国寺・東金八鶴  
 湖周辺・成東町歴史資料館・歌人伊藤左千夫の生家

講師 鈴木 勝氏  
 (詩人・県会議長)

新収蔵資料

昭和50年6月17日  
 ・A・フォンタネージ 作  
 「女神像」一点

浅井 忠 作

「金州城外之図」「韓信図」  
 「黙語君戯作菓子器」「かぶとの図」「つばきの図」「軍人の図」「帆船の図」「白浜風景」  
 「民家(A)(B)」「木かげの民家」  
 「樹」「桶とせいろ」「はたらく婦人」「ライオンの像」「お福の像」の16点

間部時雄 作

「田園風景」の1点

松岡 寿 作

「森と小川」1点

鱈 松塘 作

「題山陽先生遺像詩」「五言絶句(A)(B)」「竹之図(A)(B)」「七言絶句」の7点

梁川星巖 作

「星巖真蹟浪陶集」の1点

6月20日  
 原 勝郎 作

「森(A)」の1点

7月9日  
 浅井 忠 作

「オットセイの図」の1点

8月30日  
 鈴木 章 作

「七面鳥」の1点  
 なお、次の作品が寄贈されたので、ここに厚く御礼申し上げます。  
 8月5日

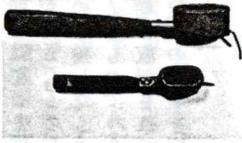
原 のぶ氏より  
 原 勝郎作「モンマルトル」  
 「街灯のある風景」「コーヒーひき」「森」「森C」「京橋」  
 「樹」「テッサン」の23点

《美の根》  
**チャンチン**

青木滋芳  
 チャンチンは蠟燭染に用いる道具である。

一見して判る様に構造は大層簡単で、丁度ひしゃくの先に細い管を差込んだ如き形をしている。

使用の際は、適温に沸した蠟を掬いた布の表面に細い線を描いてゆく。蠟は白蠟、木蠟、パラフィン等適当に混合したものを用いる。



この際一番難しいのは、温度と画く速度と布面を押える力のバランスであり、これが一

致しないとたちまち蠟がストップして、線が切れたり、途中で手が止まると滲み過ぎた

蠟で団子ができてしまい、どうやら糸の様な線が引けるには相当の熟練と経験が必要とする。こんな単純な道具が仲々入手できない秘密は、実は管の穴の細さにある。荷札の針金がやっと通る小型の方はイギリス製で、数十年の使用によって五ミリ程管がすりへってしまった。大型の方は和製で管がズツと太い。いろいろ作らせてみたが、やはり管は無理な様である。(染色家)



原勝郎作「街町のある風景」



原 勝郎作「森 A」

収蔵品紹介

篆刻一類

石井 雙石  
1873~1971



林鳥相忘不避人

昭和46年に編纂され長思印  
会から刊行された「雙石脱印」  
は昭和20年から昭和45年まで  
の作品四五〇〇顆の中から一

二〇〇顆を自選したもののなか  
にこれが収録されている。  
書籍は本文二〇〇頁の大冊  
で印影は全て原寸で収録され  
ている。その題言は雙石と同  
郷の今関天彭が記したもので  
今関天彭もこの年歿したもので  
絶筆ともいえるものである。  
天彭詩集第15巻に収録されて  
いるこの詩は雙石の全貌を紹介  
するものである。

雙石印譜題言  
吁鳴雙石子鐵筆の書 頑  
石百堅破らざるは無し  
一柔鏡妙の迹 蓮山碧海  
に連り風雲交翕開し 禽  
獸と魚龍と 百彙相騰翮  
し 漁獵厥の中に存り

不朽又不易 吁鳴雙石子  
歳將に一百に垂んとす  
天地異人を生じ 玄猷長  
く来客す  
昭和四十五年庚戌  
同郷 後学 今関天彭  
本文の一六一ノ一に印影で  
集録された作品は、本館の誕  
生にとともに県教育委員会か  
ら昭和49年4月1日付けで保  
管換され、館蔵品として収蔵  
された。たしか昭和44年に県  
教委に搬入された時は、ガラ  
スの保管箱に入れられた石材  
に刻まれた作品と画仙紙に朱  
を以て押された印影に雙石  
の手で「銘曰 林鳥相忘不避  
人」と記されていたと記憶し  
ている。  
しかし、保管換された作品  
には石材の作品と額に入れら  
れた色紙の印影のみであって、  
そこには雙石の筆跡のある印  
影の画仙は見ることができな  
い。  
たて七・二センチ、よこ四  
・八センチの印面にはコの字  
二個を組合せた限取りの中に  
「林鳥相忘不避人」と篆書で  
刻まれている。印面中央から  
右半分に「林鳥相」と一行に  
左半分に「忘不避」「人」と二  
行に陰刻している。印面はば

二・四センチの右半分は中  
央に三文字を一行に、左半分  
のはば二・四センチの中に三  
文字と一文字を二行に刻む、  
右半分は二等分され二行とし  
ているが見る人には不自然さ  
を与えない石井雙石篆刻の妙  
である。堀江知彦が「篆刻と  
いうと、型にはまったものの  
ように人は思い、また、実際  
に世間に見られるのは、その  
傾向が非常に強い一人の作家  
の場合でも、いつも同じ手法  
が繰り返されている感がふか  
い。そこへゆくと翁（雙石）  
の場合は表現の幅がすこぶる  
広く、それだけに、見ていて  
はなはだ楽しい。これは、作  
家として翁の視野の広さと、  
常に流動して止まない。いつ  
も新しさを求める作家精神の  
旺盛さとの現われに外ならな  
いと思」と雙石篆刻の妙の芽  
えの根源を「雙石脱印」の中  
で述べている。  
石井雙石が「県に差しあげ  
るのだから、戦後自分が刻ん  
で手元に蔵する作品のうち代  
表作を選んだ。もう今はほと  
んど刻むことがない」と話さ  
れたという声も聞いた。  
篆刻についてまったく無知  
な私にも、林鳥相忘れて人を  
避ず、というこの言葉と刻ま

れた作品を見ると、何んと  
楽しい感じを与えてくれる。  
この作品のことはこそ、本  
館の座右銘として常にそばに  
置いておくにふさわしいもの  
ではなからうか。  
印面の左側面に「辛卯冬雙  
石刻」と陰刻されている。雙  
石は著書「篆刻指南」に「署  
款に一定の面あり、一面に刻  
する者は須らく印の左側に存  
るべし」と記している。  
辛卯は昭和二六年であるか  
ら明治六年四月一日千葉県山  
武郡大網白里町四天木に石井  
太郎兵衛の第三子として生ま  
れた雙石七八才の作品である。  
この作品は本館が収蔵する  
までに県教育委員会が鴨川市  
・君津市などで千葉県巡回美  
術展として公開されてきた、  
また千葉県開発庁（現企業庁）  
の美術展示室のガラスケース  
の中に常設展示されていた。  
本館では昭和四九年十二月  
一日から十二月二十五日まで房  
総の美術館たちシリーズIで  
雙石コーナーに展示された。  
本館に収蔵される以前、篆刻  
の印材角にわずかばかりであ  
るが傷を付けたのはおしまれ  
ることである。  
(久保木 良)

# 千葉県立美術館のシンボルマークが きまりました。



本館が開館してから間もなく一年になろうとしている。そこで、より県民に親しまれる美術館になるために、シンボルマークを作ることになり、去る七月館職員より公募した。総応募点数七十三点。それらを、さらに第一次通過作品として八点にしぼり、最終決定として佐藤信夫の原案による上記作品を「シンボルマーク」とすることになった。このマークは、県花「なのはな」を形取り、中に美術館の「美」を配している。今後、バッチ館旗、印刷物全般に使用されることになっている。

## 知事感謝状

このたび、美術館へ作品をご寄贈いただきました原のぶ氏と岩崎巴人氏のご好意に対し、千葉県知事より感謝状が贈呈されました。両氏に厚く御礼申し上げます。次第です。

作品を公募し、郷土美術文化の振興と情操の純化を図ろうとするものです。

### 第7回千葉県高等学校芸術祭

美術・工芸・書道作品展  
11・20～11・30  
料 無

### 第20回子ども県展

12・2～12・14  
料 無

### 近代房総の美術家たち(4)

石橋武治・若木山展  
12・20～5・25  
料 無

## 団体展

▼一九七五年問われる表現展  
9・30～10・5 無料

▼第6回観光絵画とポスター  
コンクール展  
9・30～10・12 無料

▼第9回千葉市観光写真コン  
クール展  
9・30～10・12 無料

▼第22回千葉県勤労者美術展  
10・22～10・26 無料

## 観潮台

### 赤い爪染

沖繩海洋博でいくつかの発見をした。色彩文化の「赤い爪染」もそのひとつで、現代のマニキュアを考えた。沖繩本島ではむかし、女たちは鳳仙花の花の汁を用い、爪を赤く染めたといひ、その染め方は、花の汁に明礬をとかしてからぬり、鳳仙花の葉で一晩くるんでおけば、当分の間はげなかつたといひ。なぜ爪を赤く染めたのか、爪のお化粧を考えがちだが、こうして、爪を赤くしておく、草むらなどにはいつた時に、毒蛇や毒虫にかまれたりさされたりしないためだと教えられた。

上村六郎著「沖繩の色彩及び染織と民俗」を我が家で見たら、この民俗はすでに採録されており、歴史的には鳳仙花をツマクレナイとかツマペニなどと呼び、また、エジプトのミイラには、こうして染めた爪が確認されているという事であった。

とにかくマニキュアの起源には、呪的な発想がありそうだと思う。

(高橋在久)

## 美術愛好家の広場

### 「友の会」に 入りませんか

みる・かたる・つくる 千葉県立美術館友の会では、五十年会員を募集しています。「友の会」は、どなたでも入会できる美術を愛好する方々の自主的な会です。会を通して、楽しい雰囲気の中で、美術を鑑賞し、語り、創作などに参加する集いです。

### 会費

個人会員  
年額 一、二〇〇円  
賛助会員  
年額 二一、〇〇〇円

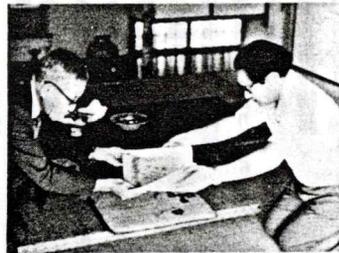
但し、新入会者の個人会員の会費は次の通りです。

四月入会者	一、二〇〇円
五月入会者	一、一〇〇円
六月入会者	一、〇〇〇円
七月入会者	九〇〇円
八月入会者	八〇〇円
九月入会者	七〇〇円
十月以降	六〇〇円

## 【お知らせ】

### 第27回県展

11・2～11・16  
料 無  
本県の美術家の作品を広く紹介するとともに、県民の美意識を高めるため、一般より



# 寄贈図書

この欄では、貴重な図書を御寄贈賜わった方々の御芳名を記し、御礼にかえさせていただきます。

(敬称略)

## 奈良県立美術館

・奈良県立美術館だより第1  
2合併号

・吉川観方コレクション図録  
・奈良県立美術館年報・昭和  
47・48年

・佐野美術館  
・江川太郎左衛門担庵展目録  
・神奈川県立近代美術館  
・原勝郎展

・平塚市博物館建設準備室  
・博物館通信 Vol.4 No.3・7号  
・平塚に博物館ができます。  
・東京都美術館  
・美術館ニュース No.二八九  
二九三

## 北九州立美術館

・北九州立美術館一九七四  
岡山県総合文化センター

・第5回郷土作家展赤松麟作  
・第12回名作展青木繁中村彝  
・第13回名作展異色の近代画  
家たち日本の野獣派

・瀬戸内美術展一九七四

・和歌山県立近代美術館  
・美術館だより第一一〇号  
一六号

・兵庫県立近代美術館  
・ピロティ第14・16号  
大阪城天守閣

・大阪城天守閣紀要第3号  
・京都国立近代美術館

・京都国立近代美術館年報  
昭和48年

## 日本画の女流

・日本画の女流  
・埼玉県立博物館  
・埼玉県立博物館だより Vol.3  
の3号・9号・11号

・小村雪岱展  
・群馬県立近代美術館  
・群馬県立近代美術館ニュー  
ス No.1・2号

・山口薫展  
・栃木県立美術館  
・県内収蔵古美術名品展  
・千葉県立安房博物館  
・千葉県立安房博物館第6  
8号

・成田山靈光館  
・収蔵品目録  
・船橋市郷土資料館  
・資料館だより第6号  
・中世の房総  
・市立市川博物館  
・ほりのうち No.4  
・遺跡シリーズ1・堀之内貝  
塚のはなし 2・下総国分  
寺址のはなし  
下総史料館  
・かみしき13  
千葉県企画部県民課県史編さ  
ん室

## 東京芸術大学芸術資料館

・東京芸術大学芸術資料館年  
報 '73

・東京国立近代美術館  
・東京国立近代美術館年報昭  
和48年  
・東京国立近代美術館所蔵品  
目録  
・第9回東京国際版画ビエン  
ナーレ展  
・15人の写真家  
・福田平八郎遺作展  
・ポール・テルポー展  
・現代メキシコ美術展  
・東京大学教養学部美術博物館  
・美術博物館ニュース  
・山種美術館  
・今日の日本画

・千葉県史料 金石文篇一  
・千葉県の歴史9  
・都市公社文化財調査事務所  
・市原大厩遺跡  
・市原市菊間遺跡  
・仙台市博物館

・仙台市博物館だより No.12  
・仙台の文化財展図録  
・仙台市科学館  
・仙台市科学館時報6号  
・仙台市科学館要覧  
・福島県文化センター  
・福島県文化センター月報昭  
和49年11月・50年8月号  
・本間美術館  
・木内克作品展一九七五  
・北海道立美術館  
・北海道立美術館友の会だ  
より第2・3号  
・昭和49年度北海道立美術館  
年報  
・市川市史第3・4巻  
・横芝町  
・横芝町史  
・美術公論社  
・美の手帖 No.一五六・一六一  
・日動画廊  
・絵第一三〇号・一三八号  
・書星会  
・書星第28巻3号・6号  
・竹尾潮(千葉市)  
・西洋美術史I・III  
・種谷扇舟(千葉市)  
・隻石脱印  
・毛主席時詞書展  
・山田友治(千葉市)  
・浅間山二号墳発掘調査報告書  
・田中庄一(二戸市)  
・画家田中貞三遺作画帳

・千葉県立美術館友の会葉美  
会では、たのしい連絡誌「し  
おさい」創刊号を発行した。  
会長鈴木民三氏の一輪を広げ  
ようーにはじまる紙面構成は、  
今後の大きな発展が期待され  
る友の会だよりとなっている。  
また、十月十二日(日)には、  
親睦をかねて、東金方面へ古  
美術と文学鑑賞のバス旅行を  
行う。

・千葉県立美術館友の会葉美  
会では、たのしい連絡誌「し  
おさい」創刊号を発行した。  
会長鈴木民三氏の一輪を広げ  
ようーにはじまる紙面構成は、  
今後の大きな発展が期待され  
る友の会だよりとなっている。  
また、十月十二日(日)には、  
親睦をかねて、東金方面へ古  
美術と文学鑑賞のバス旅行を  
行う。

・千葉県立美術館友の会葉美  
会では、たのしい連絡誌「し  
おさい」創刊号を発行した。  
会長鈴木民三氏の一輪を広げ  
ようーにはじまる紙面構成は、  
今後の大きな発展が期待され  
る友の会だよりとなっている。  
また、十月十二日(日)には、  
親睦をかねて、東金方面へ古  
美術と文学鑑賞のバス旅行を  
行う。

## 友の会報でできる

千葉県立美術館友の会葉美  
会では、たのしい連絡誌「し  
おさい」創刊号を発行した。  
会長鈴木民三氏の一輪を広げ  
ようーにはじまる紙面構成は、  
今後の大きな発展が期待され  
る友の会だよりとなっている。  
また、十月十二日(日)には、  
親睦をかねて、東金方面へ古  
美術と文学鑑賞のバス旅行を  
行う。

## 編集余録

風の通る道もいつしか変  
り美術館のまわりで遊んで  
いたヒバリの姿もみえなく  
なりました。第二期工事の  
管理棟建設も順調に進み、  
ようやくその概観を現わし  
てきました。一日も早い完  
成とともに、より皆さんに  
親しまれる美術館にと思  
います。

▼表紙作品 これは、昭和  
12年第1回新文展に出品  
されたものです。